

15. 我々の急性一酸化炭素中毒に対する治療方針

中村達雄 伊東範行 勝本淑寛
山本 衛

(千葉県救急医療センター)

急性一酸化炭素（以下CO）中毒は、急性中毒の中でも死亡率の高い疾患である。当センターの野口らは、本学会でCO中毒に対する高気圧酸素療法（以下HBO）を1日2回3週間、症状の残存する症例に対し更に1日1回3週間の継続を推奨した。三谷らは、ほぼ同等の治療を脳波、Carbon Monoxide Neuropsychological Screening Batteryを指標に行なっている。その他、長期間のHBOの有効性を示す報告が多いが、近年CO中毒に対するHBOの効果に疑問を投げ掛ける報告が散見されている。

当センターでは野口の提唱するHBOを原則としてきたが、意識の清明な症例では長期間のHBOの理解を得られないことも少なくなかった。我々は1980年以来、急性期CO中毒に対する89症例のHBOを経験している。確認される計10例の間歇型のうち、7例での間歇型発症は21病日以降であり、発症前に19回から48回のHBOを行っていた。間歇型10例中7例では間歇型発症後にHBOを施行し、社会復帰を得ている。

現在の我々の方針を以下に示す。受傷後可及的早期にHBOを施行し、意識回復の得られた症例では、その後3日のHBOを施行する。受傷後1週間の間に脳波、脳CT、MRI検査、長谷川式テストを施行し、家族による観察の可能な場合は原則として自宅退院とする。その後、受傷2週間、4週間、6週間の外来にて脳波、長谷川式テスト、適宜脳MRI検査等を施行し、経過を追跡する。その間、その後も、異常を認めた場合は緊急に来院される様に家族に説明し、間歇型と診断された場合は可及的早期にHBOを施行する。

施設毎に異なる治療方針に対し、「CO中毒に対する適切なHBO」の調査、検討が本学会で行われることが期待される。

16. 高CK血症に対するHBOの有用性の検討

佐藤借男 矢口達也

(埼玉県中央病院)

【はじめに】救急医療の診断治療において災害医療を常に念頭にいれながら臨床経験をしていかなければならない。阪神、淡路の震災時に挫滅症候群が問題となったのは周知の事実である。この挫滅症候群にHBOが有効であったという報告もある。今回、類縁疾患と考えられている横紋筋融解症を中心とする高CK血症にHBOが有効かどうかにも検討に値する。

【目的】高CK血症に対してHBOの有用性について検討した。

【対象】横紋筋融解症10例、重症熱中症1例、悪性症候群1例のうちHBO施行群6例、HBO未施行群6例を対象とした。

【方法】①定量的測定によるCKの最高値とその推移が合併症と転帰において相関関係が存在するかどうか②第1機種で1日1回、2気圧10日のHBOを施行した。HBOが高CK血症の合併症と転帰にどのように影響を与えるかをretrospectiveに検討した。

【結果】(1) HBO群の一部にCKの正常化の短縮化や一部腎機能障害の障害期の短縮化が認められた。(2) 非HBO群にむしろCKの最高値と2000u/l以上の持続時間との関係でCKや腎機能の正常化が著明に短縮した例があった。悪性症候群にダントロレンを使用した場合であった。(3) CKの最高値の値と2000u/l以上の持続時間と合併症の有無には相関関係が認められた。(4) 合併症にはshock, preDIC, 感染症, 腎機能障害, 神経徴候がみられた。(5) CKの最高値と2000以上の持続時間と腎機能の正常化までの期間にも相関が認められた。

【結論】(1) HBOが高CK血症に1部有効性を認める場合があったが全例でない。(2) HBOで悪化した症例は1例もない。(3) 悪性症候群にはHBOよりダントロレンが有効と思われる。(4) CKの最高値とCKの持続が重症度判定に有用である。